



Title	『孫子』形篇の攻守観について：竹簡本と十一家注本の比較を中心に
Author(s)	熊, 征
Citation	研究論集, 19, 157 (左)-187 (左)
Issue Date	2019-12-20
DOI	10.14943/rjgshhs.19.1157
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/79796">http://hdl.handle.net/2115/79796</a>
Type	bulletin (article)
File Information	09_rjgshhs_19_p157-188_l.pdf



[Instructions for use](#)

# 『孫子』 「形」 篇の攻守観について

## — 竹簡本と十一家注本の比較を中心に —

熊 征

### 要 旨

本稿は、1972年4月に山東省臨沂県銀雀山の漢墓から発掘された竹簡『孫子兵法』を取り上げ、その「攻」と「守」に対する考え方と、テキストの変遷に示される後世における解釈の変化について考察する。全体は3つの部分に分けられる。

第1部では、『孫子兵法』全体の攻守観についてまとめる。まず、『孫子兵法』を総括的に見て、その戦争に対する消極的な態度を分析し、戦争論より平和論を説いていることを明らかにする。そして、『孫子兵法』の「攻」と「守」を始めとする軍事の各方面、各段階における万全を追求する万全主義を論じる。最後に、『孫子兵法』全体は防御を重視する思想を説いていることを論じる。

第2部では、『孫子兵法』の攻守観が集中的に表れている形篇を中心に、十一家注本と竹簡本との相違点を比較し、両版本の重大な相違点に基づく攻守観の差異について考察する。主に、竹簡本の「善者」、「非善者」が、十一家注本では、それぞれ「善戦者」、「非善之善者」に作る点を取り上げ、竹簡本と比べて、十一家注本のほうが、「戦」のことをより積極的に説いていることを論述する。また、「攻」と「守」をめぐる改変として、竹簡本の「守則有余攻則不足」が、十一家注本では「守則不足攻則有余」に作る点、竹簡本の「不可勝守可勝攻也」が、十一家注本では「不可勝者守也可勝者攻也」に作る点、また、竹簡本の「昔善守者蔵九地之下動（動）九天之上」が、十一家注本では「善守者蔵於九地之下善攻者動於九天之上」に作る点についての分析を通して、竹簡本では肯定される守備が、十一家注本では逆に否定的に扱われていることを論じる。これらの相違点の分析を通して、第1部でまとめた『孫子兵法』の攻守観と合わせて、竹簡本のほうが孫武の本意にふさわしいことを論じる。

第3部では、同時に出土した竹簡兵書である『孫臏兵法』と『孫子兵法』の間の継承関係から、『孫臏兵法』の攻守観について考察する。重点的にその

威王問篇にある「必攻不守」に対する理解の仕方について分析する。戦争を消極的に見ている点、守備を重視し、万全を求める点において、孫臏が孫武と共通していることを明らかにする。それに基づいて考えれば、『孫臏兵法』威王問篇における「必攻不守」は、『孫子兵法』の「攻而必取（〔者〕）、攻其所不守也」を継承している可能性が大きく、「必ず守らざるを攻む」と読むのが適切であることを論じる。

## はじめに

『孫子兵法』は、さかのぼっておよそ2500年前の春秋時代呉王闔閭に仕えた孫武によって書かれた、中国の最も古い兵書である。『孫子兵法』は、世に現れた時点から現在に至るまで、たくさんの版本が現れ、様々な形で解釈されている。中国では十一家注本系統と武経七書系統、そして日本では桜田本を代表とする古文孫子系統がある。そのほか、『北堂書鈔』（隋）、『芸文類聚』（唐）や『太平御覧』（宋）などの類書に収録された版本や、『通典』（唐）や『群書治要』（唐）などに部分的に引用された版本もある。これらの版本では、細かい相違がたくさん存在するものの、全体からみると、構造と内容はほぼ一致している。

1972年4月、竹簡本『孫子兵法』（以下「竹簡本」と略す場合がある）が山東省臨沂県銀雀山にある漢墓から発掘された。解説された竹簡本の内容を、従来の伝本と比べたところ、基本的には一致している。ただ、文字や文章の入れ替えによって意味が逆になる箇所も存在している。そのため、従来の『孫子兵法』について、文字の校訂はもちろん、その文字に託されている孫武の思想についても、見直しをしなければいけなくなる。

このような『孫子兵法』を見直す研究は、竹簡本が世間に公開された時点からすでに始まっていた。1975年5月、銀雀山漢墓竹簡整理小組が3年間にわたって整理した『銀雀山漢墓竹簡孫子兵法積文注釈』<sup>1</sup>は、文物出版社より出版された。各篇ごとに、現行本、特に十一家注本との相違点について注釈が施されている。それより前、1974年、『文物』第十二期に発表された論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」<sup>2</sup>では、重要な相違点として、虚実篇の1点<sup>3</sup>と形<sup>4</sup>篇の2

<sup>1</sup> 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡孫子兵法』、1975年5月、文物出版社。1985年9月、文物出版社は精裝本の『銀雀山漢墓竹簡』〔壹〕を出版し、『孫子兵法』と『孫臏兵法』を収録した。本稿では、『孫子兵法』と『孫臏兵法』の竹簡本の底本は1985年版を使い、1975年版を参考として使っている。

<sup>2</sup> この論文の作者は「詹立波」と書かれているが、実際は「軍事科学院戦理部」の仮名であるという説もある。当論文は前掲『銀雀山漢墓竹簡孫子兵法』（1975年）の冒頭にも載せられている。

<sup>3</sup> 竹簡本では篇名は「実虚」に作るが、本稿において現行本の「虚実」に統一する。虚実篇の1点は、現行本の「我専為一、敵分爲十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡。能以衆擊寡者（後略）」が竹簡本「我専而為一、敵分而爲十、是以十擊一也。我寡而敵衆、能以寡擊〔衆者〕（後略）」に作ることである。これについて、当論文は前後の文脈及び呉国当時の情勢からみると、竹簡本のほうが孫武の思

点が挙げられている。その中、形篇における、現行本の「不可勝者、守也。可勝者、攻也。守則不足、攻則有余。善守者、藏於九地之下。善攻者、動於九天之上。故能自保而全勝也」と、竹簡本の「不可勝守、可勝攻也。守則有余、攻則不足。善守者、藏九地之下、動九〔天之上〕」<sup>5</sup>について、当論文は竹簡本のほうが孫武の「積極的な防御思想」にふさわしいものであると述べている。<sup>6</sup>ただ、当論文は上記の2点を含む形篇の各相違点について詳しい論述はなされていない。そして、「積極的な防御思想」というのは、「防御の中で、積極的、主動的に敵人を消耗し、攻撃する」という意味で、防御の積極性は、攻撃することによって成り立つことであるとされている。これは果たして孫武の本意にふさわしいかどうかについてまだ検討する余地がある。そこで、本稿は形篇の各相違点に対する考察を通して、孫武の防御と攻撃に対する考えを見直す。

## 問題提起

形篇の篇名に対する各家の注は以下の通りである。

軍之形也。我動彼応、両敵相察情也。(軍の形なり。我動き、彼応じ、両敵相ひ情を察するなり。)(曹操)

形、謂主客、攻守、八陳、五營、陰陽、向背之形。(形とは、主客、攻守、八陳、五營、陰陽、向背の形を謂ふ。)(李筌)

兩軍攻守之形也。隱於中、則人不可得而知。見於外、則敵乘隙而至。形因攻守而顯。故次「謀攻」。(兩軍攻守の形なり。中に隠るれば、則ち人得て知るべからず。外に見るれば、則ち敵隙に乗じて至る。形は攻守に因りて<sup>あらは</sup>顯る。故に「謀攻」に次ぐ。)(張預)<sup>7</sup>

「形」とは、自分側と相手側の、それぞれ攻と守における実力状況のことである。この一篇は、主に攻と守に関わることを述べていて、孫武の攻守観の理解にとって重要な一篇であることも

---

想により近いと述べている。

<sup>4</sup> 竹簡本では「刑」に作るが、本稿において篇名は現行本の「形」に統一する。

<sup>5</sup> 該当論文の引用文に従っている。竹簡本形篇には甲本と乙本があり、乙本には「故能自葆全□(□)」があるが、甲本ではこの一文が欠如している。

<sup>6</sup> 当論文は次のように云う。

長期以来、有些人認為、孫子所指防御、只是在兵力處於劣勢、即「守則不足的情況下所採取的一種不得已而為之的手段、其目的只不過是為了保存自己而「藏於九地之下」、並沒有在防御中歼灭敵人的思想。

(中略)同時又指出防御作戰的基本原則、應該是：既要「藏於九地之下」、保存自己力量、又要積極創造戰機、「動九天之上」、在防御中積極主動地消耗和打擊敵人、只有這樣、才能够達到「自保而全勝」的目的。

<sup>7</sup> 孫武撰・曹操等注、楊丙安校理『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、中華書局、1999年3月、69頁

No.	現行本（十一家注本）	竹簡本
1	孫子曰昔之善戰者先為不可勝	孫子曰昔 <span style="border: 1px solid black;">善者先為不可</span> 勝
2	以待敵之可勝	以待（待）適（敵）之可勝
3	故善戰者能為不可勝	故善者〔能為不可勝〕
4	不能使敵之可勝	<span style="border: 1px solid black;">不能</span> 使適（敵）可勝
5	故曰勝可知而不可為	故曰勝可智（知） <span style="border: 1px solid black;">而</span> 不可為也
6	不可勝者守也可勝者攻也	不可勝守可勝攻也
7	守則不足攻則有余	守則有余攻則不足
8	善守者藏於九地之下善攻者動於九天之上	昔善守者藏九地之下動（動）九天之上
9	故能自保全勝也	〔故能自葆（保）全 <span style="border: 1px solid black;">也</span> 〕 <sup>9</sup>
10	見勝不過衆人之所知非善之善者也	〔見勝 <span style="border: 1px solid black;">不</span> 過〕衆人之所知非善〔者〕也 <sup>10</sup>
11	戰勝而天下曰善非善之善者也	〔戰勝而天下〕曰善非 <span style="border: 1px solid black;">善者</span> 也
12	古之所謂善戰者勝於易勝者也	所謂（謂）善者勝易勝者也
13	故善戰者之勝也無智名無勇功	故善者之戰無奇〔勝〕無智名無勇功
14	故其戰勝不忒不忒者其所措必勝勝已敗者也	故其勝不貸（忒）不〔貸〕（忒）者〔其所錯（措） <span style="border: 1px solid black;">必</span> 勝敗者也〕
15	故善戰者立於不敗之地而不失敵之敗也是故勝兵先勝而求戰敗兵先戰而後求勝	〔善〕…… <span style="border: 1px solid black;">兵先勝而</span> 後戰敗 <span style="border: 1px solid black;">兵先戰而</span> 後求勝
16	善用兵者修道而保法	故善者脩道 <span style="border: 1px solid black;">而保</span> 法
17	故能為勝敗之政	故能為勝敗正
18	兵法	法
19	故勝兵若以鎰稱銖敗兵若以銖稱鎰	勝兵如以鎰（鎰）稱朱（銖）敗兵如以朱（銖）稱鎰（鎰）
20	勝者之戰民也若決積水於千仞之豁者形也	稱勝者戰民也如決積水於千仞（仞）〔之墀刑（形）也〕

わかる。現行本と竹簡本の相違点は次の表の通りである。<sup>8</sup>

上記の相違点の中、No.2, No.4, No.5, No.19は主に文字の欠落、虚詞の有無、仮借字のような、文意の理解にとって大きく影響しない問題である。それ以外の16点の中、No.7, No.8とNo.20は「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」において重要な相違点とされているものであり、特にNo.7とNo.8は直接「攻」と「守」に関わるものである。No.3, No.12, No.13, No.16のよ

<sup>8</sup> 現行本の中では、十一家注本を比較対象とし、底本として前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』を使っている。本稿では、甲本を元にし、甲本に欠けていて、乙本にあるものは、「[]」を付けて示す。竹簡本の甲本と乙本とも欠けている部分は「……」で示す。欠けている文字を補う場合、□を付けて示す。仮借字に対しては、十一家注本にしたがって「（）」で補って示す。

<sup>9</sup> 底本では「故能自葆（保）全□□」となっているが、注に「簡本「全」字下也可能僅欠一字、簡本或無「也」字。」とある。案ずるに、竹簡本は、謀攻篇の「必以全争於天下、故兵不鈍而可全、此謀攻之法也」の「全」と同じで、「全」の下に「也」がないのではなく、「勝」がない可能性も高い。

<sup>10</sup> 乙本では「見勝□過衆人之智非善者也」に作り、「所」がない。

うに、現行本の「善戦者」、「善用兵者」は竹簡本では「善者」に作る点、No.14のように、現行本の「其戦勝」は竹簡本では「其勝」に作る点、そして、No.10とNo.11のように、現行本では「非善之善者」に作るが、竹簡本では「非善者」に作る点は、『孫子兵法』のよしとするものに対する定義及びそれと「戦」「用兵」との関係などの問題を考える上では、興味深い点である。また、No.6の「不可勝者守也可勝者攻也」（十一家注本）と「不可勝守可勝攻也」（竹簡本）は、一見ただの虚詞の問題であって、従来の区切り方と解釈も前者と同じようにするものが多いが、前者自体については、各家の解釈が別れているところがあり、後者については、区切り方と解釈がまだ定まっていないところがある。<sup>11</sup> 以上の相違点は、ただの書き写しの誤りであるのか、もしそうでなければ、どのような意図をもって改変されたのか。そして、これらの相違点によって孫武の思想の理解にはどのような影響を与えているのか。これらの疑問を解決するためには、『孫子兵法』全体から、孫武の軍事思想、特にその攻守観に基づいて、ほかの篇における現行本と竹簡本の相違点とあわせて、分析しなければならないのである。このような作業は、竹簡本が発掘された時点からすでに行われ、一定の成果も蓄積されてきたが、意見が別れているところはまだ存在し、分析がまだ十分になされていない点もある。

## 本論

### 一、『孫子兵法』全体の攻守観

竹簡本『孫子兵法』の解読された本文は二千字あまりからなっていて、十一家注本の約六千字の三分の一にあたる。欠落部分は多いが、全体から見ると、内容や文の構造は従来の版本と似ている。以下、各版本を総合的に見た上で、『孫子兵法』全体の攻守観を考察する。

#### 1. 戦争論よりは平和論

『孫子兵法』の第一篇である計篇は、「兵者、国之大事（也）」<sup>12</sup>と、「兵」の重要性を示している。この「兵」について、「戦争」と解するのが主流である。例えば、中国において、郭化若の『今訳新編孫子兵法』では、第一篇が「論戦争」（戦争を論じる）と題され、「兵者、国之大事」を「戦争は国家的大事」（戦争は国家にとって重要なことである）<sup>13</sup>と訳されている。呉九如の『孫子校釈』においても、「此処指戦争（ここは戦争を指す）」<sup>14</sup>という注が施されている。日本

<sup>11</sup> 例えば、前掲論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」では「不可勝守、可勝攻也」に区切っているが、整理小組の釈文では「不可勝、守。可勝、攻也」に区切っている。李零氏の『『孫子』古文研究』（北京大学出版社、1995年7月）では、「不可勝守、可勝攻也」に区切っている（9頁）。

<sup>12</sup> 現行本では「兵者、国之大事」に作る。竹簡本には「也」がある。

<sup>13</sup> 郭化若『今訳新編孫子兵法』、人民出版社、1957年7月、48頁

における解釈や翻訳も「兵」を「戦争」の意味でとるのが主流である。<sup>15</sup>『孫子兵法』は、いかに巧みに戦争を営むことを説いているのであろうか。

「兵」は、元々「兵器」のことを指す。『説文解字』によると、「兵，械也。従収，持斤，並力貌（兵は，械なり。収，斤を持つに従ひ，力を並す貌）」<sup>16</sup>という意味である。引いて兵士，軍隊，戦争，軍事などのことを指す。『孫子兵法』では、「兵」の多義性も見える。この多義性を注意しながら訳しているのは，浅野裕一氏が訳注した『孫子』<sup>17</sup>である。例えば，

計篇：軍事とは，国家の命運を決する重大事である。（兵者，国之大事。）<sup>18</sup>

作戦篇：およそ軍隊を運用するときの一般原則としては（中略）こうした規模と形態の軍が戦闘という行動様式を用いるにあたり，対陣中の敵に勝利するまで長期持久戦をすることになれば，軍を疲労させ鋭気を挫く結果になり，また敵の城を攻囲すれば，戦力を消耗しつくしてしまい，また野戦も攻城もせずにはいたずらに行軍や露営をくり返して，長期にわたり軍を国外に張りつけておけば，国家経済は窮乏する。（中略）だから戦争には，多少まずい点があっても迅速に切り上げるといふ事例はあっても，完璧を期したので長引いてしまったという事例は存在しない。そもそも戦争が長期化して国家の利益になったなどということは，いまだかつてあったためしはない。したがって，軍の運用に伴う損害を徹底的に知りつくしていない者には，軍の運用がもたらす利益を完全に知りつくすこともできないのである。（凡用兵之法（中略）其用戦也，勝久則頓兵挫銳，攻城則力屈，久暴師則国用不足。（中略）故兵聞拙速，未睹巧久也。夫兵久而国利者，未有也。故不尽知用兵之害者，則不能尽於知用兵之利也。）<sup>19</sup>

こうした理由から，戦争ではすみやかな勝利をこそ最高とみなして，決して長期戦を高

<sup>14</sup> 呉九如『孫子校釈』，軍事科学出版社，1990年7月，3頁

<sup>15</sup> 日本では，江戸時代の北条氏長は『士鑑用法』（1646年）において，「夫軍法ト云ハ士法也。孫子曰。兵者国之大事……兵ト云ハ士ヲサシテ云」と云い，「兵士」と解釈した。山鹿素行は最初北条氏長と同調し，「孫子所謂兵者，士也」（『孫子句読』，1656年）と理解していたが，後「軍旅」（すなわち「戦争」のこと），「兵事ハ戦也」と解釈を改めた（『山鹿素行集』，『孫子諺義』第四，国民精神文化研究所，1939年11月，29～33頁）。それ以降，日本の学者の解釈はこれを踏襲するものが多い。荻生徂徠『孫子国字解』，徳田崑興『孫子事活鈔』，吉田松陰『孫子標注』，佐藤堅司『孫子の思想史的研究』等々はそうである。現代の訳本も「戦争」と訳しているものが多い。例えば，山井勇の「戦争は国家の重大事である」（『全釈漢文大系22 孫子・呉子』，集英社，1975年8月，45頁），天野鎮雄の「戦争は国家の重大事件」（『新釈漢文大系36 孫子・呉子』，明治書院，1972年11月初版，1975年10月第6版，23頁），金谷治の「戦争は国家の重大事である」（『新訂孫子』，岩波書店，2004年4月，28頁）等々はそうである。

<sup>16</sup> 段玉裁『説文解字注（標点本）』，藝文印書館，2006年10月，105頁

<sup>17</sup> 浅野裕一訳注『孫子』，講談社学術文庫，1997年6月第1刷発行，2000年6月第8刷発行

<sup>18</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，3頁

<sup>19</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，30頁～31頁

く評価したりはしない。(故兵貴勝、不貴久。)<sup>20</sup>

軍争篇：そこで、軍事行動は敵を欺くことを基本とし、(故兵以詐立、)<sup>21</sup>

九変篇：そこで軍事力を運用する原則としては、(故用兵之法、)<sup>22</sup>

上記の例の中、「戦争」の意味として訳されているのは、作戦篇の「故兵聞拙速、未睹巧久也。夫兵久而国利者、未有也」、「故兵貴勝、不貴久」だけである。ここはスピードを表す「拙速」や「久」があるので、具体的な「戦争」を指すとするのは問題ない。そのほかの「兵」は、「戦争」に限定されていない。特に「兵者、国之大事(也)」は、『孫子兵法』の第一篇の第一句として、孫武がこの書を書く動機を表しており、その軍事思想の根本の所在でもある。浅野氏の訳した通り、一篇の冒頭にある「用兵之法」、「兵者」のような、一般的な原則を論じる場合は、より広い意味を持つ「軍事力」、「軍事」でとったほうが適切である。『孫子兵法』の各篇の中心はいかに戦争を営むのかではなく、軍事の各方面から戦争を避け、損失を低減することにある。

具体的に言うと、計篇は、「死生之地、存亡之道、不可不察也(死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり)」<sup>23</sup>と、軍事が人の死生と国の存亡に関わることであるため、戦略を決める前の各方面の状況に対する調査と分析の重要性を述べている。作戦篇は、戦争を起こすことを論じているのではなく、逆に戦争による経済上の甚だしい悪影響を詳しく論述し、「用兵之利」ばかり考えるのではなく、「用兵之害」も忘れてはいけないことを述べている。謀攻篇もまた、むやみに攻撃することを提唱しているのではなく、できるだけ智慧を使って、国家や軍隊の保全を確保できるようにすることを論じている。そして、「不戦而屈人之兵(戦はずして人の兵を屈する)」<sup>24</sup>ことこそ孫武が考えている最善なる「攻」である。形篇から以下の各篇は、具体的な戦争における彼我の形勢の分析、そして攻撃と守備における戦略など、天時、地利、人和の各方面からの論述である。戦争に対して、孫武は、「怒可復喜也。愠可復悦也。亡国不可以復存、死者不可以復生(怒りは復た喜ぶべきなり。愠りは復た悦ぶべきなり。亡国は以て復た存すべからず、死者は以て復た生くべからず)」(火攻篇)<sup>25</sup>と厳しく見ていて、できるだけ「不戦」の「戦」を求める。そして、戦争を避けられない場合、いかに損失を最小限に収めるかということも説いている。総じていうと、『孫子兵法』は、戦争に対して、非常に慎重な態度が表れている。

<sup>20</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、38頁～39頁

<sup>21</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、123頁

<sup>22</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、145頁

<sup>23</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、1頁。本稿は『孫子』の十一家注本と竹簡本と文字の相違点を論述するところを除き、ほかの各篇の文を引用する際、文意は大きな相違がなければ、基本『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』を引き、注において竹簡本との相違を示し、場合によって竹簡本を使用する。書き下し文は金谷治訳注の『新訂孫子』、浅野裕一訳注『孫子』などを参考している。

<sup>24</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、45頁

<sup>25</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、284頁



このような思想は、戦争がしばしば起きる春秋時代において、戦争論というよりは平和を追求している貴重な思想と言えよう。<sup>26</sup>

## 2. 万全主義

『孫子兵法』謀攻篇に云う、「必以全争於天下（必ず全を以て天下に争ふ）」と。この「全」は戦争の各段階において徹底されている。戦争に入る前の謀略段階、戦争に入った実行段階、そして戦争後の収束段階における「万全主義」<sup>27</sup>を主張している。

まずは謀略段階についてである。『孫子兵法』は、「上兵伐謀（上兵は謀を伐つ）」（謀攻篇）<sup>28</sup>と、謀略戦を最善の戦争の仕方だとしている。計篇と作戰篇は、主に謀略の重要性及びそれをめぐらす際の注意点を説いている。具体的に言うと、計篇は「五事」と「七計」<sup>29</sup>を、謀略をめぐらす前の準備作業とし、勝負を決める重要な要素としている。<sup>30</sup> 作戰篇は、戦争の害を説きながら、いかに戦争の期間を縮め、自国の人力と物資の損失を最小限に収める政戦略を立てるかを説いている。そして謀攻篇は、謀略段階における自国だけではなく、敵国の保全も説いている。謀攻篇の「全国為上、破国次之（国を全ふするを上と為し、国を破るは之に次ぐ）」<sup>31</sup>についての曹操の注は次のように云っている。

興師深入長驅，距其城郭，絶其内外，敵拳国来服為上。以兵撃破，敗而得之，其次也。  
 （師を興して深く入りて長く駆け、其の城郭を距て、其の内外を絶ち、敵、国を挙げて来たりて服するを上と為す。兵を以て撃破し、敗りて之を得るは、其の次なり。）<sup>32</sup>

謀攻篇における「国」、「軍」、「旅」、「卒」、「伍」は、いずれも自国だけではなく、敵側のこと

<sup>26</sup> 佐藤堅司も前掲『孫子の思想史的研究』（風間書房、1962年1月）において、「長期戦の絶対否定論者だった孫子は、万やむを得ない場合にのみはじめて短期戦肯定論者となった。——といふことは、孫子はその本心においては戦争否定論者であつたことを意味する」（78頁）と、孫子の戦争に対する否定を指摘し、また、「孫子は主戦論者でなく、平和論者であつた」（81頁）と明確に主張している。

<sup>27</sup> 孫武の万全主義について説いた先行研究として、山鹿素行の『孫子諺義』（『山鹿素行集』、『孫子諺義』第四、国民精神文化研究所、1939年11月）、佐藤堅司の『孫子の思想史的研究』、浅野裕一訳注の『孫子』等々がある。

<sup>28</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、46頁

<sup>29</sup> 計篇に云う、「故経之以五、校之以計、而索其情」。竹簡本は「経」を「軽」、「校」を「効」に作る。これに対する曹操の注によると「謂下五事、七計、求彼我之情也」と。これによって、十一家注本は「故経之以五事、校之以計」に改めたとされる。通典本所引の「故経之以五校之以計」に従って、孫星衍校の『孫子十一家注』は「故経之以五校之計」にしているが、文意と構造からみると、「故経之以五、校之以計」のほうがより適切である。「五事」は道、天、地、将、法のことで、「七計」は「主孰賢、将孰能、天地孰得、法令孰行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明」のことを指す。

<sup>30</sup> 「五事」について「将莫不聞、知之者勝、不知者不勝」と、また、「七計」についても「吾以此知勝負矣」と、両方とも勝負の判断基準としている。

<sup>31</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、44頁

<sup>32</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、44頁

も含めていると考えられる。謀攻篇から見える孫武の敵に対する態度について、佐藤堅司氏は次のように云う。

孫子には敵をただ仇敵として憎む気持ちになかった。さきにも挙げたやうに、孫子が敵国・敵軍を全うするといつたのは、敵をも愛する精神をもつてゐたためである。<sup>33</sup> 敵を全うするという考えに基づいて、孫武は「不戦而屈人之兵」、「上兵伐謀」というような、彼我どちらにも損失の少ない戦略を推奨しているのである。また、形篇では、「称勝（勝をはかる）」（竹簡本）<sup>34</sup> ことを説き、行動する前に必ず勝つ可能性を再確認し、万全を確保することを述べている。

次は実行段階における万全である。『孫子兵法』における「形」と「勢」の区別について、李零氏は、「形」は主に計画を作る段階に関することであるのに対して、「勢」は主に計画の実行段階に関することであると指摘している。<sup>35</sup> 勢篇では、「任勢（勢に任ずる）」ことを説き、「奇正」の変化に従って臨機応変に戦略を変えることによって、确实且つ短時日で勝つということを述べている。続いて、虚実篇では「攻而必取（〔者〕）、攻其所不守也。守而必固（〔者〕）、守其所必攻也<sup>36</sup>（攻むれば而ち必ず取る（〔者〕）は、其の守らざる所を攻むればなり。守らば而ち必ず固き（〔者〕）は、其の必ず守る所を攻むればなり）」<sup>37</sup> と、「攻」と「守」の実施における万

<sup>33</sup> 前掲『孫子の思想史的研究』、82頁

<sup>34</sup> 前掲論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」では、「竹簡本における「称勝者戦民也、如决积水於千（仞）之壑、刑（形）也」にある「称」という字は、現行本には見えないことである。「称」の重要性について、当論文は、「簡本多此“称”字、這就把孫子関與“形”的根本思想点明了。所謂“称”，就是軍事实力的權衡，是決定勝負的物質基礎（竹簡本はこの「称」という字があることによって、孫子の「形」に関する根本思想を明らかにした。ここにある「称」というのは軍事实力を測って比較することであり、勝負を決める物質的な基礎に関わることでもある）」と指摘している。

<sup>35</sup> 李零氏は「現存宋代『孫子』版本的形成及其優劣」において、「在『孫子』一書中、「形」字含有形像、形体之義，主要指戰爭中客觀，有常，易見的諸因素，它主要與實力計算的概念有關，即與定計過程有關。「勢」字含有態勢之義，主要指人為，易變，潛在的諸因素，它與「形」相反，多指隨機性的和能動的東西，即與計的實行過程有關（『孫子』において、「形」という字には「形像」、「形体」の意味があり、主に戦争における客観的で、一定の状態があり、分かり易い各要素を指す。主に實力を計算する上で概念として使われ、つまり計略策定の過程と関係している。一方、「勢」という字には「態勢」の意味があり、主に人為的で、変りやすく、潜在的な各要素を指す。「形」とは逆で、任意的で能動的なものを指し、つまり計略の實行過程とか変わっているのが多い）」と述べている。（『『孫子』古本研究』、北京大学出版社、1995年7月、289頁）

<sup>36</sup> 十一家注本には「者」があるが、竹簡本にはない。そして、十一家注本では「守其所不攻」に作るが、『太平御覽』卷三一七所引及び竹簡本は「守其所必攻」に作る。「形」篇に云う、「先為不可勝，以待敵必可勝。不可勝在己，可勝在敵」と。その中、「不可勝」は守であり、「可勝」は攻である。敵が攻めてきても敵に勝てられることはないことは孫子の言う守である。また、九變篇に云う、「故用兵之法，無恃其不來，恃吾有以待也。無恃其不攻，恃吾有所不可攻也」と。「不來」、「不攻」には頼まないことであるため、「守其所不攻」とは矛盾してしまうため、「守其所必攻」のほうが孫子の主旨にふさわしいである。

全を説く。軍争篇は主に軍隊の指導と管理、そして、九変篇から九地篇までは多種多様な状況の中において、具体的取るべき行動を述べている。「塗有所不由。軍有所不擊。城有所不攻。地有所不爭。君命有所不受(塗に由らざる所有り。軍に撃たざる所有り。城に攻めざる所有り。地に争はざる所有り。君命に受けざる所有り)」(九変篇)<sup>38</sup>と、個人の感情的な考えによらず、危険な攻撃をせず、常に国と軍隊の保全を第一にして、「必謹察此(必ず謹みて之を察せよ)」(行軍篇)<sup>39</sup>、「不可不察(察せざるべからざるなり)」(九変篇、地形篇、九地篇)<sup>40</sup>などのような慎重な態度を持ちながら細かいところまで考察することを強調している。

最後は収束段階にける万全である。火攻篇に云う、「夫戦勝攻取、不随其功者、凶、命之曰費留<sup>41</sup>(夫れ戦ひて勝ち攻めて取るも、その攻に<sup>したが</sup>隨はざる者は凶なり。之を命づけて費留と曰ふ)」<sup>42</sup>と。ここの「費」というのは、まさに作戦篇に云う「馳車千駟、革車千乘、帶甲十万、千里而饋糧、則内外之費、賓客之用、膠口之材、車甲之奉、日費千金、然後十万之師挙矣(馳車千駟、革車千乘、帶甲十万、千里にして糧を饋らんとすれば、則ち内外の費、賓客の用、膠口の材、車甲の奉、日に千金を費やして、然る後に十万の師挙がる)」<sup>43</sup>というような戦争に伴う損失のことである。戦争の効果を徹底的に収めないと、これらの損失も結局無駄になる。

### 3. 防御を重視する思想

防御について、クラウゼヴィッツの『戦争論』には次のような言葉がある。

防御の目的とは何か。保持することである。保持することは、獲得することよりも容易である。そこで彼我双方の使用する手段が同一であるとすれば、防御は攻撃よりも容易である。

(中略)

防御は攻撃よりも容易であるということは、一般的な概念としてすでに述べた。しかし防御は保持という消極的目的を有するが、これに反して攻撃は攻略という積極的目的を有する。そしてこの目的を達成するためには、攻撃は進んでさまざまな戦争手段を使用せねばならないから、従ってまた防御よりも遥かに大なる戦力を消費するわけである。すると

<sup>37</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、12頁

<sup>38</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、169～171頁。竹簡本は「徐有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不行」に作る。

<sup>39</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、202頁

<sup>40</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、178頁、222頁、245頁。竹簡本では地形篇が欠如している。十一家注本の九地篇では「也」がない。

<sup>41</sup> 「隨」は「隨」に通じる。十一家注本では「夫戦勝攻取、不修其攻者凶、命曰費留」(前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、282頁)に作る。

<sup>42</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、25頁

<sup>43</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、29頁～30頁

防御と攻撃との関係性を正確に表現しようとするならば、防御という戦争形式はそれ自体としては攻撃という戦争形式よりも強力である、と言わねばならない。(中略)

防御は攻撃よりも強力な戦争形式であるが、しかし消極的をもつにすぎないから、我が方が劣勢なために止むを得ずこの形式を使用するわけである。<sup>44</sup>

クラウゼヴィッツは、戦力の消費の面から見ると防御が攻撃より強力であることを認めているにもかかわらず、「消極的目的」しか達成し得ないとし、「我が方が劣勢なためにやむを得ず」取る手段であるとする。それでは、孫武が説く防御も消極的な目的を持っているのであろうか。

前述したように、『孫子兵法』は、戦争論より平和論を説いていて、戦争に対して消極的な態度を持ち、軍事のあらゆる面の万全を述べている。軍事手段としての「攻」と「守」は、その目的が同じで、すなわち「安国全軍」(火攻篇)である。『孫子兵法』では、この目的自体は消極的な面を持つとは述べられていない。ただ、手段としての「攻」には慎重な態度、「守」には積極的な態度が表されている。

作戦篇に云う、「其用戦也、勝久則頓兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則国用不足(其の戦を用ふるや、勝つも久しければ則ち兵を頓れさせ銳を挫き、城を攻れば則ち力屈き、久しく師を暴さば則ち国用足らず)」<sup>45</sup>と。「戦争」の害として、兵の疲弊、武器の損耗、城を攻撃することによる戦力の消耗、長期戦による費用の不足が挙げられている。そのため、謀攻篇では、最も悪い作戦をやはり「攻城」とし、「故善用兵者、屈人之兵、而非戦也。拔人之城、而非攻也。破人之国、而非久也。必以全争於天下(故に善く兵を用ふる者は、人の兵を屈するも、戦ふに非ざるなり。人の城を抜くも、攻むるに非ざるなり。人の国を破るも、久しくするに非ざるなり。必ず全を以て天下に争ふ)」<sup>46</sup>と、「戦」と「攻」に対する消極的な態度を示し、必ず「全」のことを徹底することを強調している。

そして、やむを得ず戦争に入った場合、攻撃する際の注意すべき点としては、敵の強いところを避け、弱いところしか攻撃せず、損害を最小限に収めることである。例えば、前掲虚実篇の「攻而必取(〔者〕)、攻其所不守也。守而必固(〔者〕)、守其所必攻也(攻むれば而ち必ず取る(〔者〕)は、其の守らざる所を攻むればなり。守らば而ち必ず固き(〔者〕)は、其の必ず攻る所を守ればなり)」、そして、計篇の「攻其無備、出其不意(其の無備を攻め、其の不意に出づ)」<sup>47</sup>、地形篇の「挂形者、敵無備、出而勝之。敵若有備、出而不勝、難以返、不利(挂くる形には、敵備へ無くば、出でて之に勝つ。敵に若し備へ有らば、出づるも勝たず、以て返り難くして、利あらず)」<sup>48</sup>、九地篇の「兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也(兵の情

<sup>44</sup> クラウゼヴィッツ著、篠田英雄訳『戦争論』、岩波文庫、1968年2月、269頁～271頁、傍点は原著による。

<sup>45</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、30頁～31頁

<sup>46</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、50頁～52頁

<sup>47</sup> 前掲『新編諸子集成(第一輯) 十一家注孫子校理』、219頁

は速やかなるを主とし、人の及ばざるに乘じ、<sup>はか</sup>虞らざるの道に由り、其の戒めざる所を攻むるなり)<sup>49</sup>等々はそうである。相手の防御が弱いことが攻撃にとって有利になるところであるとは、かえって自分側の防御を固めることの重要性を示している。

防御の利点として、まずは、前述したように、正面からの衝突による損害を抑えること。もう一つは、攻撃より防御のほうが、主導権を握るために有利であること。九変篇に云う、「故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待也。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也（故に用兵の法、其の来たらざるを恃むこと無く、吾が以て待つこと有るを恃むなり。其の攻めざるを恃むこと無く、吾が攻むべからざる所有るを恃むなり）」<sup>50</sup>と、防御の万全によって、強い敵に攻撃されても、恐れることがなく、いつでも対応できるように準備することを説いている。これは形篇における「先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵（先ず勝つべからざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ。勝つべからざるは己に在るも、勝つべきは敵に在り）」<sup>51</sup>ということと同じ主旨である。それから、「先処戦地而待敵者佚、後処戦地而趨戦者勞（先に戦地に処りて敵を待つ者は佚し、後れて戦地に処りて戦ひに趨く者は勞す）」（虚実篇）<sup>52</sup>と、有利な場所を先取りし、防御を強化して、敵との対戦を準備する側のほうが優勢を占めることを説いている。例えば、地形篇に云う、「隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿従、不盈而従之。隘形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿従也（隘き形には、我先に之に居らば、必ず之を盈たして以て敵を待つ。若し敵先に之に居り、盈つれば而ち従ふ勿かれ、盈たざれば而ち之に従へ。険しき形には、我先に之に居り、必ず高陽に居りて以て敵を待つ。若し敵先に之に居らば、引きて之を去り、従ふ勿かれ）」<sup>53</sup>というのもそうである。『孫子兵法』は、防御が十分にできていることこそを、「致人不致於人（人を致して人に致されず）」（虚実篇）<sup>54</sup>の先決条件としているのである。

まとめて言うと、『孫子兵法』では、攻撃に対して慎重な態度が示されていて、一方、防御に対しては、敵の攻撃から自国を保全できるという積極的な意義を持つため、劣勢に立つ際にやむを得ず使用する手段であるというより、防御こそが優勢を保つための必須且つ強力な手段であるとしているのである。防御自体には積極性があり、前掲論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」が説いている防御の中で積極的に攻撃もするという事ではない。

<sup>48</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、219頁。竹簡本では該当箇所は散佚している。

<sup>49</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、245頁

<sup>50</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、175頁。この一文は竹簡本では「……不攻、……不可攻」しか残っていない。

<sup>51</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、69頁

<sup>52</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、105頁

<sup>53</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、220頁～221頁

<sup>54</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、106頁

## 二. 各相違点についての考察

### 1. 「善戦者」と「善者」

(1) 前掲の相違点の表で示したように、十一家注本における「善戦者」が竹簡本では明らかに「善者」に作るのはNo.3, No.12, No.13である。形篇の冒頭にあるNo.1について、『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』では次のような注釈が施されている。

簡本「昔善」與「勝」字之間空位約能容五字，掘今本則當為六字。本篇下文之「善戦者」，凡見於甲，乙二簡本者，皆作「善者」。疑甲本此處「善」字下亦無「戦」字。（竹簡本では「昔善」と「勝」の間には約五文字分の空きスペースがある。現行本によれば六文字が必要である。本篇における後文の「善戦者」は，甲，乙二種類の竹簡本で確認できる者はすべて「善者」に作るため，甲本のこの箇所の「善」の字の下にも「戦」の字がないと思われる。）<sup>55</sup>

竹簡本形篇全体の議論する主体から推測すると，冒頭の「善……」も「善者」であると考えられる。竹簡本『孫子兵法』と同時に発掘された『孫臏兵法』の解読された文の中には「此六者皆善者所用（此の六者は皆善なる者の用ふる所）」（威王問篇）<sup>56</sup>があるが，「善戦者」は見えない。『孫臏兵法』における「善者」もやはり，竹簡本『孫子兵法』形篇のと同じように，「善戦者」とを区別していない解釈が多いようである。例えば，金谷氏は，『孫臏兵法』の「此六者皆善者所用」を注して，「善者」とは戦いに巧みな者をさす。（補注）『六韜』「豹韜」篇にもその語があり<sup>57</sup>，『孫子』の「善戦者」にあたる<sup>58</sup>と述べている。また，1975年5月に文物出版社の出版した『銀雀山漢墓竹簡孫臏兵法』の下篇には「善者」という一篇がある。<sup>59</sup>本篇では，

善者，敵人軍□人衆，能使分離而不相救也，受敵而不相知也。（中略）善者四路必徹，五動必工。（中略）善者能使敵卷甲趨遠（善者，敵人軍して□人衆<sup>おお</sup>ければ，能く分離して相ひ救はず，敵を受けて相ひ知らざらしむ。（中略）善者は四路必ず徹し，五動必ず工なり。（中略）善者は能く敵をして甲を巻きて遠きに趨らしむ）<sup>60</sup>

とあり，全篇を通して「善者」を議論の主体としている。銀雀山漢墓竹簡整理小組は，その篇題について，「善者，指善戦者（善者，「善く戦ふ者」<sup>61</sup>を指す）」と注し，「本篇指出善戦者在作

<sup>55</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』，8頁

<sup>56</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』，51頁

<sup>57</sup> 『六韜』豹韜篇，「善者以勝，不善者以亡」（四部叢刊初編『六韜六卷』第五卷，上海商務印書館，年代不詳，40頁）。銀雀山漢墓竹簡本『六韜』ではこの一文は欠如している。

<sup>58</sup> 前掲金谷治訳注『孫臏兵法 銀雀山漢墓竹簡小組編』，152頁

<sup>59</sup> 1975年出版された『銀雀山漢墓竹簡孫臏兵法』の「下篇」にはこの一篇があるが，1985年出版された前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』では収録されていない。

<sup>60</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡孫臏兵法』，100頁～101頁

<sup>61</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡孫臏兵法』，101頁

戦時使自己處於主動而陷敵於被動（本篇は、よく戦う者は、作戰するとき自分が主動的な立場に立って、敵を受動的な立場に落ちるようにすることを述べている）」<sup>62</sup>と解釈している。ただ、これらの竹簡兵書における「戦」の有無については、より慎重に考えるべきではなからうか。

(2) 竹簡本『孫子兵法』の中、十一家注本と共通に「善戦者」に作る例として、次のようなものがある。

① 勢篇

故善戦者、求之於勢（勢）、弗責於……。（竹簡本）<sup>63</sup>

故善戦者、求之於勢、不責於人、故能招人而任勢。（十一家注本）<sup>64</sup>

② 虚実篇

先処戦地而待（待）戦者失（佚）、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不〔致於〕人。（竹簡本）<sup>65</sup>

先処戦地而待敵者佚、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不致於人。（十一家注本）<sup>66</sup>

解説された竹簡本の中では、勢篇から始めて「善戦者」が見える。上記の二箇所には、「善者」ではなく、「善戦者」が用いられた理由は、勢篇と虚実篇は、主に実際に戦闘に入った段階を論じているからであろう。<sup>67</sup> 具体的に言うとも、まず、勢篇は、「凡戦者、以正合、以奇勝（凡そ戦ふ者は、正を以て合ひ、奇を以て勝つ）」<sup>68</sup>とか、「戦勢不過奇正（戦勢は奇正に過ぎず）」<sup>69</sup>とかのように、主に「戦」の「勢」を論じている。虚実篇は、例②のように具体的な戦地に入った段階において、彼我双方の「虚」（弱いところ）と「実」（充実しているところ）を判断し、それに対応する戦略を論じている。主に戦争に入る前の攻撃と守備における軍事實力の比較段階を論じる形篇は、議論の主体として、「善者」のほうが戦争を極力避けようと主張する孫武の主旨にふさわしいのである。

(3) 相違点のNo.16について、竹簡本の「善者」は、十一家注本では「善用兵者」に作り、前文の「善戦者」と比べたら議論の範囲を広めている。前述したように『孫子兵法』における「兵」と「戦」は、スピードを表す言葉とセットで使われる場合以外、基本的に使い分けられている。

<sup>62</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡孫臏兵法』、100頁

<sup>63</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、11頁

<sup>64</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、98頁

<sup>65</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、12頁

<sup>66</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、105頁～106頁

<sup>67</sup> 竹簡本九地篇の「所胃古善戦者、能使適人前後不相及」（前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、21頁）では「善戦者」を使っている（この箇所が十一家注本では「善用兵者」（前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、243頁）に作る）が、これも具体的な戦地におけることを説いているからであると言える。

<sup>68</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、87頁

<sup>69</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、89頁

「用兵」は軍事行動を取ることを意味し、戦争を指す「戦」より広い意味を持っている。「用兵」、「戦」や「用戦」を区別している例として、以下のようなものがある。

①孫子曰、凡用兵之法（中略）〔其〕用戦〔也〕、勝久則頓<sup>70</sup>〔兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則国用不足。〕（中略）〔善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於国、因糧於敵。故軍食可足也〕。（作戰篇）<sup>71</sup>

②故善用兵者、誦（屈）人之兵而非戦也。（謀攻篇）<sup>72</sup>

③故用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戦之、少則能逃之、不若則能避之。（謀攻篇）<sup>73</sup>

④〔孫子曰、凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、圯地<sup>74</sup>無舎〕、衢〔地交合、絶地無留、圍地則謀〕、〔死〕地則戦。（九變篇）<sup>75</sup>

『孫子兵法』の竹簡本と十一家注本とも、「凡」と云う場合、「用兵之法」というのはよく見えるが、「用戦之法」は見えない。また、上記の例の①と②において、「善用兵者」が議論の主体として使われている場合、それを「善者」に置き換えることはできるが、「善戦者」に置き換えることはできない。②のように「善用兵者」を論じる時、「戦」を排除することもある。『孫子兵法』において、「善者」、「善用兵者」と「善戦者」の関係はおおよそ以下のように表すことができる。

善者＞善用兵者＞善戦者

「善者」は政治と戦略の領域にあり、「善戦者」は戦術と戦闘の領域にある。十一家注本の形篇は、「善者」を「善戦者」に変えることによって、竹簡本より、「戦」のことを強調するようになることがわかる。

(4) 相違点 No.13 の竹簡本における「故善者之戦、無奇〔勝〕」は、十一家注本では「故善戦者之勝也」に作ることも同じ傾向が見える。この点について、河野収氏は次のように述べている。

「無奇勝」の1句は、戦いそのものに関するものである。即ち「善戦者之勝也」を受ける句としては先の2句<sup>76</sup>でよいが、「善者之戦」をうける句としては「無奇勝」の1句こそ重要であり、あとの2句はむしろ付録である。何時失われたか判らないが、本来は「無奇勝」が第1句として置かれていたに違いない。これが失われたから、「善者之戦」が「善戦者之

<sup>70</sup> 十一家注本は「鈍」に作る。古代では両文字が通じる。

<sup>71</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、5頁

<sup>72</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、6頁

<sup>73</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、52～55頁。竹簡本ではこの一文が欠落している。

<sup>74</sup> 竹簡本では「汜地」に作る

<sup>75</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、17頁

<sup>76</sup> 「無智名」「無勇功」の2句



勝也」になったのであろう。<sup>77</sup>

と、この一文における「無奇勝」の重要性を説明している。つまり、「無智名」「無勇功」は「無奇勝」の追加説明である。この重要な言葉が削除された理由について、浅野裕一氏は、勢篇における「以奇勝」と関連づけている。

竹簡本の「無奇勝」なる一句は、他の諸本にはいずれも存在しない。これはつぎの勢篇に「奇を以て勝つ」と記されることとの矛盾を考慮して、後人の手で削除されたものであろう。だがそれは、孫子の言う奇を、奇策——奇抜極まる戦法と誤解したことに由来する。孫子が勢篇で説く奇とは、決して世間が諒解しているような奇術・詐術まじじゆつの類を意味しない。この点を踏まえるならば、先の一句を矛盾と考えて削除する必要性は全くない。<sup>78</sup>浅野氏は、「無奇勝」が削除された理由を二篇の「奇」を混同したことに由来していると解釈している。そして、形篇の「奇」が奇抜極まる奇術・詐術の意味とし、また、勢篇の「奇」について、『孫臏兵法』の奇正篇に基づいて、「無形の兵力配備で敵の有形なる兵力配備を制圧する」<sup>79</sup>という意味で解釈している。しかし、そもそも、形篇と勢篇の「奇」は品詞においても違っている。「無奇勝（奇しき勝ち無し）」の「奇」は形容詞で、「まれな」という意味を表す。「以奇勝（奇を以て勝つ）」の「奇」は名詞であり、「奇術」のことであって、『老子』に云う「以奇用兵（奇を以て兵を用ふ）」（第五十七章）<sup>80</sup>と同じである。十一家注本では、「故善者之戦無奇勝」が「故善戦者之勝也」に書き換えられた理由として、一つは、両篇の「奇勝」を同一視したことによる矛盾を避けるため、もう一つは議論の主体を「善戦者」に統一するためではなかろうか。さらに最も重要な理由として、書き換えた者の視野に政戦略がなく、戦術的思考にとどまったためであろう。

また、竹簡本の形篇にある「善者之戦」の「戦」は、やはり「不戦」の「戦」を求めると理解すべきであろう。「無智名、無勇功」についての注として次のようにある。

勝於未萌，天下不知。故無智名。曾不血刃，敵国已服。故無勇功也。（未だ萌さざるに勝ちて、天下知らざる。故に智名無し。曾て血刃せず、敵国已に服す。故に勇功無きなり。）（杜牧）<sup>81</sup>

陰謀潜遠，取勝於無形，天下不聞有料敵制勝之智，不見搴旗斬将之功。（陰かに謀り、遠きに潜み、勝を無形に取り、天下敵を料りて勝を制するの智有るを聞かず、旗を搴ぬきて将を斬るの功を見ず。）（張預）<sup>82</sup>

<sup>77</sup> 河野収「銀雀山漢墓竹簡孫子兵法研究：形篇・勢篇」、『防衛大学校紀要』第四十二輯「人文・社会科学編」，1981年3月，401頁

<sup>78</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，64頁

<sup>79</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，76頁

<sup>80</sup> 朱謙之『新編諸子集成（第一輯）老子校釈』，中華書局，1984年11月，230頁

<sup>81</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』，74頁

「善者」の「戦」は、「天下曰善」というような華々しい戦いではなく、謀略を使うことによって戦わずして勝利を得ることである。これは、十一家注本では「善戦者之勝也」に作り、戦争に対する態度が変わってくる。「戦」を強調するという意図の下、相違点のNo.14の竹簡本における「故其勝不貸（忒）<sup>83</sup>」は、十一家注本では「故其戦勝不忒」と、「戦」が加えられ、竹簡本における「不戦」によって得ることも含む「勝」が、「戦」によって得る「勝」に限定されている。そして、No.15の竹簡本における「……兵先勝而後戦」は、十一家注本では「勝兵先勝而後求戦」と、「戦」の前に「求」の字が加えられ<sup>84</sup>、勝ちが保証されなければ戦わないという竹簡本の主旨が、勝つ可能性があれば戦いを求める、という主旨に傾いている。

## 2. 「非善之善者」と「善者」

相違点のNo.10とNo.11は、いずれも竹簡本の「善者」が、十一家注本では「善之善者」に作ることである。前後の文はそれぞれ次のようになっている。

〔見勝不過〕衆人之所知，非善者也。戦勝而天下曰善，非善者也。挙〔秋毫不為多力〕，視日月不為明日，聞雷霆不為聰（聡）耳。所胃（謂）善者，勝易勝者也。（竹簡本）<sup>85</sup>

見勝不過衆人之所知，非善之善者也。戦勝而天下曰善，非善之善者也。故挙秋毫不為多力，見日月不為明日，聞雷霆不為聡耳。古之所謂善戦者，勝於易勝者也。（十一家注本）<sup>86</sup>

竹簡本は全体として、「善者」のあるべき姿を論じている。「挙秋毫不為多力，見日月不為明日，聞雷霆不為聡耳（秋毫を挙ぐるは多力と為さず，日月を見るは明目と為さず，雷霆を聞くは聡耳と為さず）」という三つの比喩は、「善者」にふさわしくない軍事者のレベルの低さを喩えている。そして、「善者」は勝ちやすいところに勝った人であるという定義を出した。その論証の構造は次のようになっている。

「善者」の反例①を挙げる→否定→「善者」の反例②を挙げる→否定→比喩をもって理由を述べる→「善者」ならでの「勝」の定義について結論を提出

一方、十一家注本は、竹簡本と比べて、論理上矛盾しているところがある。「非善之善者」というのは、まだ最も高いレベルの「善者」とまでなっていないが、「善者」ではあるということが潜んでいる。そうすると、三つの比喩の意義が失われてしまう。十一家注本のこの三句の意義について、古来の注釈者は種々苦心していて、三句が衆人のなすところを述べたもので、智

<sup>82</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』，74頁

<sup>83</sup> 十一家注本では「忒」に作る。

<sup>84</sup> 『長短経』（唐趙蕤撰、『叢書集成』，上海商務印書館，1937年6月）の魏篇（185頁），料敵篇（275頁），先勝篇（282頁），また曾慥の『類説』七書孫子（文学古籍刊行社，1955年11月，卷三十九，3頁）所引にはいずれも「求」がない。『文子』下徳篇の「王兵先勝而後戦」（陸費逵総勘，高時顕，呉汝霖輯校，『四部備要』，中華書局，19—（詳細年代不明），21頁）も「求」がない。

<sup>85</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』，8頁

<sup>86</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』，73頁～74頁

将はそれと異なるものであると解釈することが多く、前文の「非善之善者」及び後文の「善戦者」との繋がりについてははっきりと解釈していない。<sup>87</sup>これについて、荻生徂徠はすでに『孫子国字解』において疑問を提出した。

古來の説には、此段の三句を前の段の衆人の知る処と云へるにかけて見て、名将のする所は「拳秋毫」、「見日月」、「聞雷霆」如きの誰もなることにてなしと云ふ意に見たり。一旦聞ゆる様なれども、「見勝不過衆人之所知、非善之善者也」と云ふ文に泥みて、名将の勝ちを見るは、人の見がたき所を見ると思ひてかく注せり。是れ大きな誤りなり。衆人の知る所は知り難きを知らんとす。(中略)名将の戦ひ勝つは勝ち易き所に勝ちて、秋毫を挙ぐるが如し。前には「戦勝而天下曰善、非善之善者也」と云ひ、次には「古之所謂善戦者、勝於易勝者也」と云へる間にある此段なれば、とかくなり易きをするをば常の人は誉めねども、是れ名将の道なりと見ねば、前後の文勢通貫せぬなり。<sup>88</sup>

と。荻生徂徠は、三句の比喩は後文の「勝於易勝」にある「勝ち」の「易さ」を言っているという説を提出している。これと同じ方向で説いているのは、山鹿素行の『孫子諺義』である。

今案ずるに此の三句は下の「勝於易勝」の四字を注解せり。善の善なる勝は此の如く手あるものは天下皆挙げ、目あるものは天下皆之を見、耳あるものは天下皆聞くが如くなる故に、百度戦ふても、<sup>たが</sup>忒はざるに至る。是れ智名無く勇功無きにあらずやと云へる心なり。<sup>89</sup>

荻生徂徠と山鹿素行は、比喩の前半しか解釈してなく、後半の「不為多力」、「不為明目」、「不為聡耳」という批判的な言葉について解釈していないため、前後の文意の矛盾を解消することはできていないと言える。また、山鹿氏は「善之善者」にある「者」のことを「勝」にしているが、「見勝不過衆人之所知」、「戦勝而天下曰善」からみると、これは人物に対する評価のはず

<sup>87</sup> 各家の注は次のようになっている。

李筌曰、易見聞也。以為攻戰勝、而天下不曰善也。夫智能之將、人所莫測、為之深謀、孫武曰「難知陰也」。

王皙曰、衆人之所知、不為智、力戰而勝人、不為善。

何氏曰、此言衆人之所見所聞、不足為異也。昔烏獲拳千鈞之鼎為力、離朱百物為明。師曠聽蚊行蠅步為聡也。兵之成形而見之、誰不能也。故勝於未形、乃為知兵矣。

張預曰、人皆能也。引此以喩衆人之見勝也。秋毫謂兔毛至秋而勁細言至輕也。

<sup>88</sup> 荻生徂徠『孫子国字解』卷之四、出版社及び出版年代不明、10頁

<sup>89</sup> 前掲『山鹿素行集』、『孫子諺義』第四、122～123頁。「今案ずるに」の前に「義・直解・開宗・武徳全書・武経大全等の諸説、此の三句を以て上文の衆人の勝を見るに喩ふと為す。云ふところは上兵の勝つ処は此の如く誰も致すことにて勝つにあらざるなり。予も亦嘗て謂へらく、此の三句は上文の衆人の勝を見るに喩ひ、下文の智名無く、勇功無し的一句は、天下善しと曰ふに当る。中間勝つに易しの一句を以て之を断つ如く、されば此の説上文衆人の勝つを見ると云ふに相類せる言の如し。故に往々之を注解するに此の如し」(122頁)と述べる。当初諸説と同じように理解していたが、後考え方を改めたのである。

である。それに、孫武の所謂「易勝」というのは、決して簡単にできるものであるとは言えない。「勝可知、而不可為」と言っているように、「勝」は知るしかできないことで、自動的にコントロールできることではないのである。ここで孫武が言っている「易勝」は、「勝」を得る過程や手段の簡単さというより、損失を最小限に確保できたことに重点を置いているのであろう。

ちなみに、「非善之善者」という言葉は、現在解説されている竹簡本の内容には見えないが、十一家注本の謀攻篇には次のようにある。

是故百戰百勝，非善之善者也。不戰而屈人之兵，善之善者也。（是の故に百戰百勝は，善の善なる者に非ざるなり。戦はずして人の兵を屈するは，善の善なる者なり。）<sup>90</sup>

竹簡本では、上記の文は欠落しているが、傍線部分はそれぞれ「非善者」と「善者」に作る可能性が高い。「不戰而屈人之兵」と同じ主旨を述べている文として、後文にある「故善用兵者，屈人之兵而非戰也（故に善く兵を用ふる者は，人の兵を屈するも，戦ふに非ざるなり）」<sup>91</sup>というものがある。後者は、十一家注本と竹簡本とも「善用兵者」に作り、「善之善者」のような特別に強調している言葉が使われていない。「不戰而屈人之兵，善用兵者也」となる可能性もあるが、この部分は、謀攻篇の冒頭「孫子曰、凡用兵之法、全国為上、破国次之、全軍為上、破軍次之、全旅次之、破旅次之、全伍為上、破伍次之」に次ぐ部分にあたり、全体の主旨を述べている文に属し、主題の「全」に関わる文脈において、「百戰」と「不戰」とを対比して、いずれが「善」か「非善」かを述べさえすればよいのではなかろうか。

また、十一家注本の「是故百戰百勝，非善之善者也」について、河野収氏は次のように述べている。

「現行孫子・謀攻篇」の「百戰百勝非善之善者也不戰而屈人之兵善之善者也」は、「百戰百勝するのは、善いことではあるが、最善ではない。戦わないで敵兵を屈伏させるのが最善である。」と解釈できる。つまり「戦かうからには、百回戦ったら百回とも勝つべきだ」としているように見える。「竹簡」のように「百戰百勝非善者也不戰而屈人之兵善者也」とすると、「百戰百勝」は不善であり、「不戰而屈人之兵」は「善」であるということになる。「百戰百勝」を「不善」とする主張には、「六、七分の勝利」を「善」とする思想がひそんでいる。<sup>92</sup>

河野氏はまた、「後世、指揮官のモラルが低下して、功名心や世上の名声等が動機づけの要素として大きな作用を及ぼすようになってから、「非善之善者也」と緩和した表現に修正されたのであろう」と、十一家注本は時代の状況に合わせて加筆されたものであることを指摘している。『漢書』趙充国伝には、「戦而百勝，非善之善者也（戦ひて百勝するは，善の善なる者に非ざる

<sup>90</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』，45頁

<sup>91</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』，50頁

<sup>92</sup> 河野収「『現行孫子』と『竹簡孫子』の比較研究(1)」、『防衛大学校紀要』第四十七輯「人文・社会科学編」，1983年9月，296頁

なり)」<sup>93</sup>という文から見ると、すくなくとも後漢時代はすでに「非善之善者」に作る版本があることが推測できる。ただ、十一家注本の各家の注から見ると、「不戦而屈人之兵、善之善者也」に対する何氏の注で『後漢書』の「善之善者」を引用した以外は、「是故百戦百勝、非善之善者也」に対する曹操の注は「未戦而戦（敵）自屈、勝善也（未だ戦はずして敵自ら屈するは、勝の善なり）」<sup>94</sup>と、賈林の注は「斯为上也（斯れ上為るなり）」と、張預の注は「故云非善（故に非善と云ふ）」と、また「不戦而屈人之兵、善之善者也」に対する張預の注は「則为大善（則ち大なる善為り）」と、いずれも「善之善者」という表現が使われていないことも興味深い。戦いによる「勝」を「非善」とする思想は、老子が云う「兵者、不祥之器、非君子之器。不得已而用之、恬淡为上、勝而不美、而美之者、是樂殺人。夫樂殺人者、則不可以得志於天下矣（兵は、不祥の器、君子の器に非ず。已むを得ずして之を用ふれば、恬淡を上と為し、勝ちて美とせず。而し之を美とすれば、是れ人を殺すを楽しむなり。夫れ人を殺すを樂しめば、則ち以て志を天下に得べからず）」（第三十一章）<sup>95</sup>、「不爭而善勝（争はずして善く勝つ）」（第七十三章）<sup>96</sup>という戦争を批判し、そして、戦いによる「勝」を「善」（『老子』では「美」と評価する対象とも見なさない思想と一致していると言える。

「善者」と「善之善者」、「非善者」と「非善之善者」というような、すこしの言葉遣いによって意味合いが変わってしまう修正が、形篇と謀攻篇の二篇においてもなされていることは、偶然なことであるとは考えられない。「百戦百勝」を「非善」として低く評価するのではなく、「最善」ではないが、「善」ではあると評価するために意図的に修正されていると思われる。

### 3. 「攻」と「守」をめぐる改変

(1) 相違点のNo.7とNo.8について、論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」はすでに、竹簡本のほうが孫子の思想にふさわしいと指摘している。また、銀雀山漢墓竹簡整理小組は次のように注釈している。

十一家本作「守則不足、攻則有余。」各本皆同。但漢人言兵法者多言攻不足守有余。『漢書』趙充国伝「臣聞兵法、攻不足者守有余。」、『後漢書』馮異伝「夫攻者不足、守者有余。」、『潜夫論』救辺「攻常不足、而守恒有余也。」、文義皆與簡本相近。『通典』卷一五二引形篇篇首至「故善守者藏於九地之下」一段、缺此二句、但其後引皇甫嵩救陳倉事、所加標題正為「守則有余、疑所見亦與簡本同。然皇甫嵩與董卓論救陳倉事、有「彼守不足、我攻有余」語（『後漢書』皇甫嵩伝）。李賢注、「孫子之文」。曹操注『孫子』此二句亦就守不足攻有余

<sup>93</sup> 班固撰・顔師古注『漢書』、卷六十九、中華書局、2987頁

<sup>94</sup> 続きの文「不戦而屈人之兵、善之善者也」に対する曹操の注は「未戦而敵自屈服」となっていて、ここも「未戦而敵自屈」である可能性が高い。

<sup>95</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）老子校釈』、125頁～127頁

<sup>96</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）老子校釈』、287頁

立論、似後漢時已有作「守則不足，攻則有余」之本。（十一家注本は「守則不足，攻則有余。」に作る。各版本もみな同じである。しかし、漢代の人は『兵法』を言う時、多くは「攻不足，守有余」を言う。『漢書』趙充国伝に「臣聞く、『兵法』に「攻めて足らざる者，守りて余り有り」と。」とあり、『後漢書』馮異伝に「夫れ攻むる者は足らず，守る者は余り有り。」とあり、『潜夫論』救辺篇に、「攻むるは常に足らざるも，守るは恒に余り有るなり。」とある。文の意味はいずれも竹簡本に近い。『通典』卷一五二では、形篇の篇首から「故善守者藏於九地之下」に至るまでの一段が引かれるが、この二句が欠けている。ただ、その後で、皇甫嵩が陳倉を救ふことを引いて、付けた標題はまさに「守則有余」であり、参考にした版本も竹簡本と同じである可能性がある。しかし、皇甫嵩が董卓と、陳倉を救うことを議論する会話では「彼守不足，我攻有余」という言葉が見える（『後漢書』皇甫嵩伝）。李賢は「孫子の文」と注を施している。また曹操も、『孫子』のこの二句に対する注として「守不足攻有余」について論を立てている。そのため、後漢の時すでに「守則不足，攻則有余」に作る版本があったかもしれない。）<sup>97</sup>

最初の『孫子兵法』では「守則有余，攻則不足」となっている可能性が高いことがわかる。皇甫嵩のセリフに引張られて、曹操以降の注釈者は「守則不足，攻則有余」に基づいて解釈するようになったかもしれないが、そもそも皇甫嵩が見た版本は必ずしも「守則不足，攻則有余」になっているとは言いきれないのであろう。『後漢書』における皇甫嵩伝のセリフは次のようになっている。

嵩曰、「不然。百戦百勝，不如不戦而屈人之兵。是以先為不可勝，以待敵之可勝。不可勝在我，可勝在彼。彼守不足，我攻有餘。有餘者，動於九天之上。不足者，陷於九地之下。今陳倉雖小，城守固備，非九地之陷也。王国雖強，而攻我之所不救，非九天之勢也。夫勢非九天，攻者受害。陷非九地，守者不拔。国今已陷受害之地，而陳倉保不拔之城，我可不煩兵動衆，而取全勝之功，將何救焉。」遂不聽。（嵩曰く、「然らず。百戦百勝，戦ひて人の兵を屈するに如かず。是を以て先に勝つべからざるを為して，以て敵の勝つべきを待つ。勝つべからざるは我に在りて，勝つべきは彼に在り。彼の守足らずして，我が攻に餘り有り。餘り有るとは，九天の上に動く。足らざるとは，九地の下に陥いる。今陳倉は小なりと雖も，城守りて固くして備はり，九地の陷に非ざるなり。王国強しと雖も，而して我の救はざる所を攻め，九天の勢に非ざるなり。夫れ勢は九天に非らざれば，攻むる者は害を受く。陷は九地に非ざれば，守る者は抜かれず。国今已に受害の地に陥り，而して陳倉は抜かれざるの城を保ち，我兵を煩はし衆を動かさずして，全勝の功を取るべき，將た何を救はんや。」遂に聴かず。）<sup>98</sup>

<sup>97</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』，8頁

<sup>98</sup> 南朝宋・范曄，唐・李賢等注『後漢書』，中華書局，1965年5月，2305頁

皇甫嵩は形篇の文を部分的に引用し、彼なりの解釈によって言葉を変えている。形篇では、「不可勝在己可勝在敵」に続く「不可勝（者）守（也）可勝（者）攻（也）」があるが、皇甫嵩はこれを引用せずに、直接我が敵（彼）に「勝つべき」理由を敵（彼）の「守」が足りないからとし、敵（彼）が我に「勝つべからざる」理由を我の「攻」には余裕があるからとする。そして、続いて「有余」と「不足」の状態について、それぞれ「動於九天之上」と「陷於九地之下」と説明している。孫武の云う「善守者蔵於九地之下」というプラスの意味を持つ言葉も変えている。とはいえ、皇甫嵩は「守」自体を否定しているわけではなく、「不足」に重点を置いている。「城守固備、非九地之陷也」、「陷非九地、守者不拔」から、「守」がよくできている場合、積極的な結果に結びつくという彼の考えが窺える。この考えに基づいて、彼が結局董卓の陳倉を救えという意見を聞かずに、守備に集中し、最後に「城堅守固、竟不能拔。賊衆疲敝、果自解去（城堅く守固ければ、竟には抜く能はず。賊衆く疲敝すれば、果して自ら解去す）」という成果を取めた。これはまさに『通典』の付けた標題「守則有余」の通りである。

竹簡本の「守則有余、攻則不足」の意味について、浅野氏は、「守備なる形式を取れば、戦力に余裕があり、攻撃なる形式を取れば、戦力が不足する」<sup>99</sup>と訳している。そして、「守則不足、攻則有余」のような改竄が生じた理由について、「兵力が劣勢だから守備にまわり、優勢だから攻撃するとの区分の方が、通俗的思考にとって分かりやすく、孫子の真意が理解できなかったため」<sup>100</sup>だと推測している。また、河野氏は、このような改竄に基づく孫子の思想に対する理解は、クラウゼヴィッツの『戦争論』が主張している、守備が「消極的目的」を持っているのと同じであると述べている。<sup>101</sup>

(2) 同じ意図による改竄は、この箇所直前にある、「不可勝者守也可勝者攻也」（十一家注本）と「不可勝守可勝攻也」（竹簡本）においても行われている。ただ、管見の限り、先行研究ではあまり問題視されていない。竹簡本『孫子兵法』関連の書物の解釈も、基本十一家注本と一致して、「不可勝、守。可勝、攻也。（勝つべからざるは守にして、勝つべきは攻なり。）」とするのが多い。前掲論文「略談銀雀山漢墓竹簡『孫子兵法』」と前掲書李零氏の『『孫子』古本研究』では「不可勝守、可勝攻也」に区切っているが、理由は述べられていない。

十一家注本の「不可勝者、守也。可勝者、攻也。」についての解釈は、大きく言えば、三パターンに分かれる。

一つは、「守」と「攻」を、「不可勝」と「可勝」の原因として、「勝つべからざる者は、守ればなり。勝つべき者は、攻むればなり。」と読んでいる。例えば、山鹿素行は次のように云う。

不可勝可勝ト云の二ツハ、発端ニ云処ノ、為不可勝待可勝也。云心ハ、敵人我ニ不得勝ハ、我能守り備フルユヘナリ。可勝ト云ヘルハ、カハツテ彼ヲ可攻撃ノ図ヲ云ヘル也。<sup>102</sup>

<sup>99</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、58頁

<sup>100</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、59頁

<sup>101</sup> 前掲河野収「銀雀山漢墓竹簡孫子兵法研究：形篇・勢篇」、397頁

山鹿素行は、「先為不可勝，以待敵之可勝。不可勝在己，可勝在敵」と関連し、「己に在る」「不可勝」はすなわち己側の「守り備える」ことであり、「敵に在る」「可勝」はすなわち敵側を「攻撃できる」ことであると解釈している。この場合、敵人が我に勝てない理由は、我の守備ができてからである。敵人に勝てる理由は、(敵が弱点をさらし) 敵を攻撃する条件を作ったからであることになる。ただ、この解釈では、「守」の積極性を明確にしているが、「攻」は「可攻」になり、前の「守」との対立関係が成立しなくなる。

二つ目は、この一文を、前文において論じられてきた「不可勝」と「可勝」の定義(あるいは解釈)として、「勝つべかざる者とは守なり，勝つべき者とは攻なり」と読む解釈である。例えば、

使敵不能勝我，這是屬於防守方面的事。使我可以勝敵，這是屬於進攻方面的事。(敵が我に勝てないことは、防守にかかわることである。我が敵に勝てることは、攻撃にかかわることである。)(郭化若)<sup>103</sup>

だれにもうち勝てない態勢とは守備にかかわることである。だれでもうち勝てる態勢とは攻撃にかかわることである。(金谷治)<sup>104</sup>

敵軍が自軍に勝てない態勢とは守備なる形式のことであり、自軍が敵軍に勝てる態勢とは攻撃なる形式のことである。(浅野裕一)<sup>105</sup>

若要不被敵人戰勝，就要採取防禦。想要戰勝敵人，就要採取進攻。(敵人が自分に撃ち勝つことがないようにするためには、防禦をしなければいけない。自分が敵人に撃ち勝つためには、攻撃をしなければいけない。)<sup>106</sup> (呉九如)

上記の中、浅野裕一氏と呉九如氏は、「勝」や「守」「攻」の主語を補い、「守」と「攻」とを異なる状況における手段としている。ただ、これに続く文について、浅野裕一氏と呉九如氏とも「守則有余，攻則不足」と竹簡本のほうを取っているが、解釈が異なっている。浅野氏は、「守備なる形式を取れば、戦力に余裕があり、攻撃なる形式を取れば、戦力が不足する」<sup>107</sup>と、「守」の積極性を明確にしている。呉氏は、「採取防禦，是因為敵人兵力有余。採取進攻，是因為敵人兵力不足(防禦を取るのは、敵人の兵力に余裕があるためで、攻撃を取るのは、敵人の兵力に不足があるためである)」<sup>108</sup>と、「守」と「攻」の主語を「我」にして、「有余」と「不足」の主語を「敵」にすることによって、「守」と「攻」に対する態度を平等に説くようにしている。一

<sup>102</sup> 前掲『山鹿素行集』、『孫子諺義』第四，118頁。

<sup>103</sup> 孫武撰，郭化若訳『孫子今訳』，上海古籍出版社，1977年6月第1版，1978年5月新第1版，10頁

<sup>104</sup> 前掲金谷治訳注『新訂孫子』，56頁

<sup>105</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，58頁

<sup>106</sup> 前掲『孫子校釈』，65頁

<sup>107</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』，58頁

<sup>108</sup> 前掲『孫子校釈』，65頁



方、この箇所について、郭化若氏と金谷治氏は、「守」と「攻」に対する態度を明確に示していないようであるが、これに続く文として十一家注本の「守则不足、攻則有余」をとるため、「守」を消極的状况における手段と解釈している。

三つ目は、「不可勝」と「可勝」を、「守」と「攻」の条件（あるいは目的）とし、「勝つべからざれば、守るなり。勝つべければ、攻むるなり。」と読んでいる。つまり、『太平御覧』巻三一七所引の「不可勝則守、可勝則攻」と同じ方向で読んでいる。<sup>109</sup> 例えば、陳曦、駢宇騫著の『孫子兵法・三十六計』の「不能戰勝敵人，就要採取防禦。可以戰勝敵人，就要採取進攻（敵に撃ち勝つことができなければ、すなわち防禦する。敵に撃ち勝つことができれば、すなわち進んで攻撃する）」<sup>110</sup> はそうである。これは、杜牧、杜佑、梅堯臣、王皙、張預らの注に従っている解釈である。例えば、杜牧は、「不可勝者守也」について、「言未見敵人有可勝之形，己則藏形，為不可勝之備，以自守也（言ふところは、未だ敵人に勝つべきの形有るを見ざれば、己則ち形を藏し、勝つべからざるの備へを為して、以て自ら守るなり）」<sup>111</sup> と云い、「可勝者攻也」について、「敵人有可勝之形，則當出而攻之（敵人勝つべきの形有れば、則ち當に出でて之を攻むべし）」と云っている。「不可勝者」と「可勝者」を、「守」と「攻」の条件としている。そして、「守」は、相手には勝つべきの形が見えないというような消極的な狀況における戦略で、「攻」は、相手に「可勝」の形がある場合には必ず積極的に行うべきであるとしている。そうすると、「不可勝」と「(力) 不足」、「可勝」と「(力) 有余」がそれぞれ対応でき、理屈も通じるようになる。

一方、「不可勝守、可勝攻也。（守に勝つべからずして、攻に勝つべきなり。）」と区切る場合、上記のように「守」を消極的に、「攻」を積極的に解釈できる可能性がなくなる。後文の「守则有余、攻則不足（守れば則ち余り有り、攻むれば則ち足らず）」とは矛盾は生じない。前後一貫して「守備の方が、戦力に余裕を生ずる有利にして強力な形式」<sup>112</sup> ということを論じている。「不可勝守、可勝攻也」というのは、守備する態勢は、力を藏しているから強い態勢であり、それに勝つことはできず、これに対して、攻撃する態勢は、力を露わにしているから弱い態勢であり、それに勝つことはできるということを言っている。そこでは、「守」のことがプラスに、「攻」のことがマイナスにされている。早くも曹操の注において、これに近い理解が見える。曹操は、「不可勝者守也」について「藏形也（藏るる形なり）」<sup>113</sup> と云い、「可勝者攻也」について、「敵攻己、乃可勝（敵、己を攻むれば、乃ち勝つべし）」<sup>114</sup> と云っている。具体的に言うと、その

<sup>109</sup> 李昉『太平御覧』巻三一七、国泰文化事業有限公司、1980年、1459頁。ただ、同書巻三一九所引は「不可勝者、守也。可勝者、攻也」（1468頁）となっている。

<sup>110</sup> 陳曦、駢宇騫『孫子兵法・三十六計』、中華書局、2016年1月第1版、2018年3月第五刷、97頁

<sup>111</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、71頁

<sup>112</sup> 前掲浅野裕一訳注『孫子』、59頁

<sup>113</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、71頁

<sup>114</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯）十一家注孫子校理』、71頁

軍事實力つまり「形」が隠されている場合なら、それに勝つことはできない。一方、敵が「攻」の態勢に入った場合こそ、その「形」が露わになった状態でもあるので、それに勝つことはできるのである。敵側がそうであるのならば、己側にしても同じ理屈である。しかし、次の「守則不足、攻則有余」の曹操の注は「吾所以守者、力不足也。所以攻者、力有余也（吾の守る所以なる者は、力足らざればなり。攻むる所以なる者は、力余り有ればなり）」<sup>115</sup>となっていて、矛盾が生じてしまう。つまり、軍事實力を隠すことによって、相手に勝たれないようにすることのできる積極的な意義を持つ「守」は、逆に軍事實力が足りないという消極的な状況によることになってしまったのである。

総じて言うと、十一家注本の形篇は、「不可勝者守也可勝者攻也」に変えることによって、上記の三つ目の解釈のように、「守則不足、攻則有余」と合わせて、「守」と「攻」に対する態度を逆にし、守備の消極性と攻撃の積極性を強調した解釈が可能になり、しかも主流になっている。

ちなみに、竹簡本が世に現れる前、日本の江戸時代の大儒者である佐藤一斎は、『言志四録』の「言志後録」に「守則有余、攻則不足」に近い見解を出している。

攻者有余、守者不足、兵法或其然也。余則謂守者有余、攻者不足。以不攻攻之、攻之上也。（攻むる者は余り有りて、守る者は足らず。兵法或は其れ然らむ。余は則ち謂ふ、「守る者は余り有りて、攻むる者は足らず」と。攻めざるを以て之を攻むるは、攻むるの上なり。）<sup>116</sup>

佐藤一斎は、『孫子兵法』の原文が間違っていると言わず、個人の見解として述べている。『漢書』や『後漢書』を参考したかどうかはわからないが、はっきりと通説と反対の説を提出する見解であると言っても過言ではない。彼にはまた、「先為不可勝、以待敵之可勝。」、是其下手処。「必以全争於天下」、是其着眼処。「校之以計、而索其情」、是其秘密処（「先に勝つべからざるを為し、以て敵の勝つべくを待つ」、是れ其の手を下す処。「必ず全を以て天下に争ふ」、是れ其の眼を着くる処。「之を校ぶるに計を以てして、其の情を索む」、是れ其の秘密なる処）<sup>117</sup>、「有攻法、必有守法（攻むる法有らば、必ず守る法有るべし）」<sup>118</sup>、「士氣不振、則防禦不固。防禦不固、則民心不能固（士氣振はざれば、則ち防禦固からず。防禦固からざれば、則ち民心固まる能はず）」<sup>119</sup>など守備を重視する思想が見える。「守者有余、攻者不足」の根拠とされている、「以不攻攻之、攻之上也」は、まさに孫武の「不戦而屈人之兵、善（之善）者也」に基づいたものではなかろうか。『孫子副註』を書いた彼は、『孫子兵法』を全般に読み込んだ上で、孫武の

<sup>115</sup> 前掲『新編諸子集成（第一輯） 十一家注孫子校理』、71頁。既述の皇甫嵩の言葉に起引するか。

<sup>116</sup> 佐藤一斎著、山田準・五弓安二郎訳注『言志四録』、岩波書店、1935年6月、358頁

<sup>117</sup> 前掲佐藤一斎著、山田準・五弓安二郎訳注『言志四録』、362頁

<sup>118</sup> 前掲佐藤一斎著、山田準・五弓安二郎訳注『言志四録』、362頁

<sup>119</sup> 前掲佐藤一斎著、山田準・五弓安二郎訳注『言志四録』、381頁

真意を把握し、当時伝わっている兵法の不自然なところを感じ、従来の解釈に対して異論を發したのかもしれない。

#### 4. 「善守者……善攻者……」と「善守者……」

No.8について、前述したように、この一文は前半部分のまとめである。竹簡本の甲本では「昔善守者蔵」しか残っておらず、乙本では「昔善守者、蔵九地之下、動（動）九天之上」とあり、十一家注本の「善守者、蔵於九地之下。善攻者、動於九天之上」比べたら、最も大きな違いは竹簡本の主語は「善守者」しかないのに対して、十一家注本では「善攻者」が追加されている。これは相違点No.6とNo.7の改変と関連性がある。No.6では「可勝者、攻也」、No.7では「攻則有余」と改変し、攻撃の積極性を明白にした以上、結論の部分ではもっぱら「善守者」の優勢のみを説くのは不自然であるから、「善攻者」を入れて、冒頭の「善戦者」と呼応しようとするのではなかろうか。

また、このような改変の時代背景について、河野氏は次のように述べている。

もともと『孫子』は、国家保全のための防衛的な戦争を中心として述べたものであり、征服的、侵略的な戦争は考えていなかったのではあるまいか。『孫子』の考えた戦争は、常に「防者」の立場で起るのである。それ故に、我は常に「守者」である。

(中略)

秦、漢、又は曹操などは、天下統一という名の征服戦争を実行した。このような立場から見ると、戦争の主体者は「守者」の場合だけではなく、むしろ積極的な「攻者」であった。そこで秦、漢以後すなわち竹簡以後のある時期に、ここの「善守者」が、戦争の主体者を意味していることが見失われ、戦闘の主体者と見られるようになったのであろう。<sup>120</sup>

実は、曹操の注は「因山川、丘陵之固者、蔵於九地之下。因天時之變者、動於九天之上（山川、丘陵の固に因る者は、九地の下に蔵る。天時の変に因る者は、九天の上に動く）」となっていて、「守」と「攻」とを対比して解釈していない。彼が見た版本では「善攻者」はまだ追加されていない可能性もある。「因山川、丘陵之固者」と「因天時之變者」とも、「善守者」を前提として言っているかもしれない。曹操が「地」と「天」を具体的な「地利」と「天時」にしていることに対して、李筌は批判する意見を提出したが、その注も「九地」、「九天」に注目し、「攻」と「守」の関係に言及していない。<sup>121</sup>

<sup>120</sup> 前掲河野取「銀雀山漢墓竹簡孫子兵法研究：形篇・勢篇」、396頁～397頁

<sup>121</sup> 李筌の注に云う、「『天一遁甲経』云、「九天之上可以陳兵、九地之下可以伏蔵。」常以直符加時干、後一所臨宮為九天、後二所臨為宮為九地。地者、靜而利蔵。天者、運而利動。故魏武不明二遁、以九地為山川、九天為天時也。夫以天一、太一之遁幽微、知而用之、故全也。経云、「知三避五、魁然独処。能知三五、横行天下。」以此法出、不拘諸咎、則其義也。」と。「九天之上可以陳兵」、「天者、運而利動」という「九天」に関する解釈も、「善守者」だけを主語にしている前提の下で言っている内容で

明白に「守者」、「攻者」と解釈したのは杜佑以降の注である。解釈の変化に従って、原文も変えられてしまったのであろう。確かに、「動於九天之上」は攻撃のことを言っている。ただ、その主語は必ずしも「善攻者」でなければ文が通じないわけではない。「善守者」という主語だけでも、万全な「守」（守勢・守備）で、「九地の下」に隠れ、一旦攻撃に転じた場合には、「九天の上」から発動する。主導権を自分の手に握っているからできるのである。

そして、竹簡本で読む場合、この文の前半部分は「攻」と「守」を対比しながら論じているが、「守則有余、攻則不足」という文からはすでに結論を結ぶ段階に入り、重点は「守」に置くようになってきている。最後の「故能自葆（保）而全……」（竹簡本形篇）<sup>122</sup> というのも、「守」によって、余力を保った上で勝利を得られるという結論を出している。

以上、十一家注本と竹簡本の形篇における重要な相違点を考察した。これらの相違点によって、「守」を積極的に主張し、「攻」をやむを得ずとする手段として消極的に見ている竹簡本の攻守観は、十一家注本では「守」は消極的な要素を持つようになり、逆に「攻」「戦」を積極的に説くようになってきている。

### 三. 孫臏における孫武の攻守観の継承

#### 1. 孫臏の攻守観について

1972年4月、千年余り散佚していた『孫臏兵法』は、竹簡本『孫子兵法』と同時に銀雀山漢墓で発掘され、学界に大きな衝激を与えた。それ以来、孫臏の軍事思想についての研究は盛んに行われ、多大な研究成果が得られた。就中、孫臏の攻守観が一つ重要な課題となっている。孫武の子孫だと伝えられる孫臏は、多方面から孫武の軍事思想を継承しているということはいうまでもないが、その攻守観について、「以進攻為主、而不是以防禦為主的戰略（進攻を主として、防禦を主とすることはしない戦略）」という『孫子兵法』とは逆の思想を持っていると言われている。このような評価は、主に威王問篇にある、「兵之急者」についての威王の質問に対して、孫臏が「必攻不守、兵之急者也」と答えたことを、「必ず攻めて守らざるは、兵の急なる者

---

ある可能性もある。十一家注本の「故能自保而全勝也」は、竹簡本では「故能自保而全（欠）」となっている。銀雀山漢墓竹簡整理小組編の『孫子兵法』では「故能自保而全〔□□〕」としているが、その注釈は「十一家注本作「故能自保而全勝也。」簡本「全」字下也可能僅欠一字、簡本或無「也」字。」となっている。竹簡本「全」の下に一字しかない場合、もう一つの可能性として「勝」がないことである。李筌が「夫以天一、太一之遁幽微、知而用之、故全也」と解釈している内容である。「全」は、戦争における全面的な勝利を指すだけでなく、謀攻篇に云う「必以全争于天下」のように、守備をもって、戦争を避け、「全国」、「全軍」、「全旅」、強いて「全敵」というより広い意味での「全」であろう。

<sup>122</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫子兵法』、9頁

なり」というように解釈することを根拠としている。近年、「必攻不守」を「必ず守らざるを攻む」と解釈する新しい意見も出された。<sup>123</sup> 中国の訳注及び研究では、最初の解釈を誤解と見て、新しい解釈で取る傾向が見えるが、管見の限り、日本の訳本や研究書ではまだこの新解を取ったものはないようである。<sup>124</sup> 「必攻不守」の解釈によって、孫臏の攻守観に対する理解も大きく異なってくる。本章では、主に孫武の攻守観との継承関係の角度から、孫臏の「必攻不守」に対する解釈を検討する。

まず、孫臏の戦争観全般を考察してみる。それを記しているのは、彼が齊の威王に拝謁し、その会話を記録した見威王篇である。

夫兵者、非士（恃）恒執（勢）也。此先王之傳道也。戰勝、則所以在亡国而繼絶世也。戰不勝、則所以削地而危社稷（稷）也。是故兵者不可不察。然夫樂兵者亡、而利勝者辱。兵非所樂也。而勝非所利也。事備而後動。故城小而守固者、有委也。卒寡而兵強者、有義也。夫守而無委、戰而無義、天下無能以固且強者。（夫れ兵なる者は、恒の勢を士（恃）むものに非ざるなり。此れ先王の傳道なり。戰ひ勝てば、則ち亡国を在らしめて絶世を繼ぐ所以なるも、戰ひ勝たざれば、則ち地を削られて社稷を危ふくする所以なり。是の故に、兵なる者は察せざるべからざるなり。然らば夫れ兵を楽しむ者は亡び、而して勝ちを利とする者は辱めらる。兵は楽しむ所に非ざるなり。而して勝ちを利とする所に非ざるなり。事備はりて後動く。故に城小なるも守りの固き者は、委あればなり。卒寡きも兵の強き者は、義あればなり。夫れ守りて委なく、戰ひて義なければ、天下に能く以て固くして且つ強き者なし。)<sup>125</sup>

<sup>123</sup> 例えば、鄧沢宗が『孫臏兵法注訳』において「必攻不守」について、注では「指攻撃敵人沒有防備的地方。一説指以進攻敵人為主、而不是以防御為主的戰略。訳文従前説」と、訳文では「攻撃敵人沒有防備的地方」と解釈している。（解放軍出版社、1986年3月、17頁）

<sup>124</sup> 例えば、村山孚訳注の『孫臏兵法』（徳間書店、1976年2月、81頁）では「必ず攻め守らざるは、兵の急なるものなり」と訓読し、「“必攻不守”（必ず攻めて守らず）の考えに立つこと、これこそいちばん重要と心得ます。」と解釈している。そして、前述した「善者」篇について、村山孚は「またかれは齊の將軍・田忌の問いに答えて、「必ず攻めて守らず、兵の急なる者なり」（上篇「威王問」と語っていることから明らかなように、「攻撃こそ最大の防御」という戦略思想に立っている」と述べている。金谷治訳注の『孫臏兵法』（東方書店、1976年7月）も同じように訓読し（148頁）、注では「進攻を主として、防御を主とすることはしない戦略をさしている。」（153頁）と解釈し、「必ず攻撃して守備にまわらないことが、軍の最も重要なことです。」（157頁）と訳している。この他、「折衷的な扱い方」も見られる。例えば、劉心健の『孫臏兵法新編注訳』の注では、「以進攻為主、不以防御為主。要堅決打擊敵人空虛而要害之処；不守沒有防守措施或防守薄弱之処（進攻を主として、防禦を主とすることはしない。かならず敵の手薄の急所を攻める。防禦のないあるいは弱いところを守らない）」と、上記の意見を合わせていて、現代中国語訳では「重点攻撃敵方空虛而要害之処、才是用兵最緊要的（重点的に敵の手薄の急所を攻撃する、これこそが用兵において最も肝心なところである）」と、新解釈に基づいている。（劉心健編著『孫臏兵法新編注訳』、河南大学出版社、36頁）

<sup>125</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の「孫臏兵法」、文物出版社、1985年9月、48頁。訓読は、前掲

孫臏も、「兵」を上位概念の「軍事」または「戦争」と、「戦」を下位概念の「作戰」または「戦闘」とに使い分けている。ただ、孫武と比べると、「兵」と「戦」とを区別する度合が小さくなっている。これは、孫武が生きていた春秋時代と比べて、孫臏が生きていた戦国時代では戦争の回数が多くなり、規模や激しさも大きくなり、戦争を完全に回避することが無理になっていて、「兵」は往々にして「戦争」と同一視されてしまうからであろう。とはいえ、孫臏は、戦争を積極的に起こすわけではなく、孫武と同じように慎重な態度を持っている。上記の文の中、まず、軍事形勢の変化が多いことを提示し、それから、利と害との両面性を持つ戦争を厳しく見なければいけないことを強調している。これは『孫子兵法』の「兵者、国之大事也。死生之地、存亡之道、不可不察也」という考えを受け継いでいる。

また、戦争を否定的に見ていることも孫武と共通している。「然るに夫れ兵を楽しむ者は亡び、勝を利とする者は辱めらる。兵は楽しむ所に非ざるなり。而して勝は利とする所に非ざるなり」と、戦争の残酷性、勝利も見方によって害に転換する可能性があることを述べている。<sup>126</sup> また、戦争の機能として、一つは、「亡国を在らしめて絶世を継ぐ」ことである。もう一つは、仁義や礼楽などの手段が通じない場合に限り、「以禁争掎（奪）（以て争掎（奪）を禁じ）」<sup>127</sup>の方法である。さらに、纂卒篇では、「其傷在於数戦（其の傷は数しば戦ふに在り）」<sup>128</sup>、「悪戦者、兵之王器也（戦を悪むは、兵之王器なり）」<sup>129</sup>と、「戦」を強く批判している。

因みに、事前の準備を重視し、あらゆる面の万全を求める点も孫武と同じである。例えば、「事備而後動」と、行動を取る前の準備作業の万全を確認すること。「事備」の内容について、月戦篇では具体的な「天時、地利、人和」<sup>130</sup>の三者が備わることと述べている。慎重に考察し、判断した上で、孫武と同じように、孫臏も守備のことを重視する。「用兵無備者傷（兵を用ひて備へ無き者は傷つく）」<sup>131</sup>（威王問篇）と、事前の準備の足りないことによる損害を強調している。

## 2. 「必攻不守」について

孫武の敵の守備の弱いところしか攻撃の対象としないという考えは、『孫臏兵法』においても受け継がれている。特に威王問篇は最も多く説いている。例えば、

營而離之、我並卒而擊之、毋令敵知之。然而不離、按而止。毋擊疑。（營はして之を離し、

---

村山孚訳注の『孫臏兵法』と金谷治訳注の『孫臏兵法』を参考している。

<sup>126</sup> 月戦篇に云う、「〔十戦〕而十勝、将善而生過者也」というのも同じ主旨である。（前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、59頁）

<sup>127</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、48頁

<sup>128</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、58頁

<sup>129</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、58頁

<sup>130</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、59頁

<sup>131</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、51頁

我は卒を並せて之を撃ち、敵をして之を知らしむることなかれ。然り而して離れざれば、按じて止まる。疑を撃つことなかれ。)

威王曰、「以一〔撃〕十、有道乎。」孫子曰、「有。攻其無備、出其不意。」(威王曰く、「一を以て十を〔撃〕つに、道有らんや。」孫子曰く、「有り。其の無備を攻めて、其の不意に出づ。」)

埤垌広志、嚴正輯衆、避而驕之、引而勞之、攻其無備、出其不意、必以為久。(垌を<sup>ひく</sup>くして志を広くし、正を厳しくして衆を輯め、避けて之を驕らせ、引きて之を<sup>つか</sup>勞らせ、其の無備を攻めて、其の不意に出で、必ず以て久しきを為す。)<sup>132</sup>

上記の例からみると、『孫臏兵法』は『孫子兵法』計篇の「攻其無備、出其不意」という考えを継承していることが分かる。この考えに基づく『孫子兵法』虚実篇の「攻而必取（〔者〕）、攻其所不守也」は、「必攻不守」という簡略化された形で継承されている可能性が考えられる。

文法構造の角度から考えてみれば、「必攻不守」について、各家の解釈が分かれている分岐点は、主に「攻」と「不守」との構造にある。具体的に言うと、「必ず攻めて守らず」で解釈する場合、「不守」と「必攻」とを並列関係と見て、主観上の「守らない」として理解している。それに対して、「必ず守らざるを攻む」で解釈する場合、「不守」が、「必攻」の目的語となり、客観上の「守られていないところ」として理解している。虚実篇の「攻而必取、攻其所不守也。守而必固、守其所不攻也」では、「所」をもって「不守」が名詞化され、「攻」の目的語になっている。「所」がなく、直接「不守」を「攻」の目的語にしているのは『管子』幼官篇の次の文に見える。

器成教守、則不遠道裏。号審教施、則不險山河。博（搏）一純固、則独行而无敵。慎号審章、則其攻不待権與。明必勝則慈者勇、器無方則愚者智、攻不守則拙者巧、数也。(器成りて教へ守らるれば則ち道裏を遠とせず、号審かに教へ施さるれば則ち山河を險とせず、博（搏）<sup>せん</sup>一純固なれば則ち独行して敵無し、号を慎み章を審かにすれば則ち其の攻むるに権與を待たず。必勝を明かにすれば則ち慈者も勇に、無方を器にすれば則ち愚者も智に、守らざるを攻むれば則ち拙者も巧なるは、数なり。)<sup>133</sup>

これに対する日中の各注釈本を調べた結果、例外なく「不守」を「攻」の目的語として「守らざるを攻む」と解釈する。「攻めて守らず」と読まれていないのは、「必」がないため、「攻」と「不守」を並列関係で考えにくくなるためかもしれないが、文脈から考えても、「守らざるを攻む」が最も適切である。『管子』においては、「攻不守」以外、『孫子兵法』の「攻其無備、出其不意」、「攻而必取（〔者〕）、攻其所不守也」と同じ主旨であると考えられる表現も多く見える。例えば、「以備攻備、備存不攻。积実而攻虚、积堅而攻脆、积難而攻易（備へを以て備へを攻め、

<sup>132</sup> 前掲『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』所収の『孫臏兵法』、50頁～51頁

<sup>133</sup> 黎翔鳳撰、梁運華整理『新編諸子集成 管子校注』、165頁～166頁

備へ存すれば攻めず。実を積<sup>す</sup>てて虚を攻め、堅を積<sup>す</sup>てて脆を攻め、難を積<sup>す</sup>てて易を攻む)」霸言篇)<sup>134</sup>、「径乎不知，発乎不意。径乎不知，故莫之能御也。発乎不意，故莫之能応也（知らざるに径し，意はざるに発す。知らざるに径す，故に之を能く御ぐ莫きなり。意はざるに発す，故に之に能く応ざる莫きなり）」（兵法篇)<sup>135</sup>等々はそうである。

以上を要するに、孫臏は、孫武の基本的な戦争観、特に攻守観を継承していて、「必攻不守」は「必ず守らざるを攻む」と読むのが適切であると言える。

#### 四. 結論

本稿は、『孫子兵法』形篇を中心に、竹簡本と十一家注本の相違点を比較することを通して、文字表面の差異だけではなく、両版本が伝えている攻守観にも差異が存在することを考察した。具体的に言うと、「戦」に対する態度について、竹簡本のほうがより消極的であるのに対して、十一家注本では、「善者」から「善戦者」に改変することや、「戦勝」に対する「非善者」の判断を「非善之善者」に改変すること、「戦」の前に「求」という積極的な意義を持つ言葉を追加することなどによって、積極的な姿勢も見えてくるようになった。そして、直接「守」、「攻」を論じた言葉である「守則有余，攻則不足」の意味を逆にして、「善守者」と並んで「善攻者」を追加することと、「不可勝守，可勝攻也（守に勝つべからずして，攻に勝つべきなり）」を「不可勝者，守也。可勝者，攻也（勝つべからざるは，守なり。勝つべくは，攻なり）」という文意を逆の方向に導く改変によって、守備を重視し、攻撃を保守的に見る孫武の攻守観を方向転換させている。竹簡本形篇のほうが、戦争論より平和論を積極的に説き、積極的な守備によって万全を求める孫武の思想にふさわしいと言える。

一方、『孫臏兵法』と『孫子兵法』との比較を通して、攻守観において、孫臏も、基本的に孫武の影響を受け、その兵法に織り込んでいることがわかる。同じく守備を重視し、攻撃に対する保守的な態度を持つ孫臏である以上、「必攻不守」を「必ず攻めて守らず」というふうには読むべきではなく、「必ず守らざるを攻む」と読んだほうが適切であることがわかる。これは、意味上類似する『孫子兵法』の「攻而必取（〔者〕），攻其所不守也」、及び文脈と文法構造上類似する『管子』の「攻不守」によっても証明できることである。

(ゆう せい・言語文学専攻)

<sup>134</sup> 前掲『新編諸子集成 管子校注』，479頁

<sup>135</sup> 前掲『新編諸子集成 管子校注』，320頁



